

フリースクールからの大学進学 をめぐるジレンマ

—大学進学がもたらす光と影—

藤 村 晃 成

1. 問題設定

本稿の目的は、フリースクール卒業後に大学進学するプロセスがいかなる意味を持つのかを、卒業生へのインタビューから明らかにすることである。

日本におけるフリースクール⁽¹⁾は、主に不登校の子どもを受け入れる非一条校の民間施設である。1980年代以降に学校制度外のオルタナティブな教育の場として全国に普及するようになり、公教育制度や「学校」の存在意義を問い直す存在として注目されてきた。その背景には、不登校を病理視する社会的なまなざしに対抗する社会運動が展開されてきた、という歴史的経緯がある（佐川 2009）。現在では、スタッフが掲げる理念や利用者のニーズに応じた多様な活動形態による実践が行われるようになっている⁽²⁾。

先行研究では、フリースクール内の相互作用や内部実践の独自性が描き出され、「居場所」としての役割が強調されている。例えば、佐川（2010）は、学校的環境を可能な限り排除する空間構築や、「受容と共感」の感情規則にもとづくスタッフの関わりといった、フリースクールの支援構造を明らかにしている。また朝倉（1995）は、フリースクールでのエスノグラフィーを通して、不登校の子どものアイデンティティの変容プロセスを明らかにしている。「居場所」には「自己再定義（self-redefinition）」の機会を作り出す機能があり（住田 2004）、フリースクールは不登校経験によるネガティブな自己物語を肯定的に捉え直すことが可能な場所として捉えられているのである。

(ふじむら・こうせい 広島大学大学院)

しかし、フリースクールの「居場所」としての役割が卒業後の生活にどのように関連するのか、という点については十分に検討されてこなかった。例えば、御旅屋（2015）は、フリースクールの先行研究に対して『居場所』がいかに成立しているか」という視角のみが採用されているために、「居場所」が外部社会から隔離された空間として捉えられていることが見落とされてしまうことを指摘している。さらに貴戸（2004）は、不登校経験者の「居場所」経験と「その後」の関係に着目し、不登校を肯定的に捉える「選択の物語」では回収できない葛藤の側面が不登校経験者にあることを指摘している。

これらの指摘からは、「居場所」と外部社会との関係に焦点を当てた研究が求められていることがうかがえる。言い換えれば、フリースクールにおける内部実践が、在籍する利用者の不登校経験を読み替えるためだけではなく、卒業後の生活世界にも大きく影響していることが考えられるのである。それにも関わらず、フリースクール卒業後に着目したインテンシブな調査は十分に行われていない。とりわけ、近年では不登校による進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが懸念され、「進路形成の問題」の観点による学校教育機関や職業システムへとつなげるための支援方法を検討する必要性が指摘されている（森田編 2003）。このような状況を踏まえれば、進路形成との関係から分析することによって、フリースクールの「居場所」としての役割や存在意義を捉え直すことができるのではないだろうか。

本稿の研究関心は、フリースクールの内部実践から進路形成への視点の転換を試みることである。具体的には、フリースクール卒業生による大学進学に対する意味づけと卒業後の生活世界との関係に着目することで、フリースクール卒業後に大学進学するプロセスがいかなる意味を持つのかを検討する。

2. 本稿の分析視点

本稿における方法論及び研究上の意義を検討することで、本稿の分析視点を明確にしておきたい。まずは方法論上の意義についてである。本稿ではフリースクール卒業生に対するインタビュー調査にもとづいて分析を行う。たしかに、フリースクール卒業後の進路形成を明らかにするためにはアンケート調査とい

ったマクロな視点によるアプローチも重要であろう。しかし、フリースクールにおける進路形成のプロセスや意味づけを「当事者」の視点から詳細に描き出すためには、フリースクール卒業生の「語り」に着目することが重要である。

不登校経験者へのインタビューを行った貴戸（2004）は、不登校に関する言説の語り手が非当事者に偏っており、当事者の物語を支配的な言説に方向づける権力性が存在するという問題について言及している。進路との関係についても、当事者が『不登校によるマイナス』をわが身にこうむりながら不登校を自分の経験として肯定する必要に迫られるひとつの立場（p.99）であるという背景を踏まえて、当事者自身が「自分の進路の問題」として不登校を語ることに目を向けるべきであると指摘している。貴戸の指摘を本稿の研究関心と照らし合わせるならば、フリースクールにおける内部実践や卒業後の生活世界を当事者の語りとの関係から考察していく必要があるといえる。「進路形成の問題」として不登校に対する社会的関心が向けられているからこそ、当事者の主観的な解釈からフリースクールからの進路をめぐる様相を描き出すことに意義があるのである。

次に研究上の意義についてである。本稿ではフリースクール卒業後に大学進学するプロセスに焦点を当てる。もちろん、フリースクール卒業後における進路の全体像を描くことは不可欠であるが、以下に示す理由からフリースクールから大学進学することの意味を明らかにすることが、フリースクールの存在意義を再考していくために重要であるといえる。

教育社会学の領域では、学校教育段階における進路形成についての研究が多く蓄積されており、近年では不登校・高校中退者を積極的に受け入れる学校や教育機関における進路形成にも着目されるようになった。メインストリームの「学校」への進学に困難を抱える生徒を受け入れる“非主流”校の後期中等教育機関の存在が、「高卒（扱い）の学歴」「学力」「学校生活で得られる経験」を提供して次の進路へ送り出すという若者の社会的自立に向けたセーフティネットとしての役割を担っていることや（伊藤 2014a）、「不登校トラック」（山田 2010）とも呼ぶべき不登校経験者の進路先の整備が急速に進みつつある状況が示されている。

さらに、不登校・高校中退後における進路選択のプロセスの解明や、各学校

／教育機関での支援実践と卒業後のライフコースとの関連性の検討なども行われている（古賀 2015, 伊藤 2017 など）。とくに、私立通信制高校サポート校における大学進学行動に着目した内田（2016）は、サポート校の学校経験を経て大学合格を達成した生徒たちには、高校中退経験そのものを各個人の描く「成功物語」獲得のための進路変更として積極的に捉え直す、という自己再定義過程があったことを明らかにしている。つまり、不登校・高校中退者を積極的に受け入れる学校／教育機関における大学進学支援の役割が期待される社会的状況があるだけでなく、不登校経験者にとって大学進学という進路達成が重要な意味を持っていることが明らかにされているのである。

本稿の研究関心に引き寄せて考えれば、「学校」とは異なった実践が意義づけられてきたフリースクールにおいて、制度的な教育機関である大学に進学するという進路達成はどのような意味を持つのだろうか。学校制度外の民間施設であるフリースクールからの大学進学行動に着目することは、単にフリースクールの存在意義を再考するためだけではなく、教育社会学で蓄積されてきた進路研究に対する示唆をもたらすこともできると考えられる。

以上を踏まえて、フリースクールの卒業後に大学進学するプロセスがいかなる意味を持つのかを卒業生へのインタビューにもとづく「語り」の分析によって描き出すことを本稿の分析課題として設定したい。

3. 調査概要

3.1. フリースクール X の概要

本稿の調査対象であるフリースクール X は中国地方に位置する NPO 法人の民間施設である（表 1）。主に不登校の子どものための安心できる「居場所」を提供することが理念として掲げられており、2004 年から継続して活動が続けられている。在籍する利用者の多くは、不登校や高校中退などの背景を持っており、学校的な空間や教師－生徒関係などに対して強い拒否感を抱いている。そのため、フリースクール X では学校的な側面を感じさせない配慮がなされている。具体的には、フリースクール X への来所・退所時間や活動の内容などはスタッフではなく利用者自身が自由に決めることができるようになってお

り、様々な背景を持つ利用者を柔軟に受け入れる「居場所」としての役割を果たしている。

表1 フリースクールXの概要

設立年	2004年
運営形態	NPO法人
連携	私立通信制高校Y校、放課後等デイサービスZ
コース(対象)	フリーコース(小・中学生へ)、通信制コース(高校生)、アフターコース(卒業生・若者)
在籍者	小学生:1名、中学生:2名、高校生:約20名
スタッフ	常勤スタッフ:4名、ボランティアスタッフ:約30名

また、小・中学校から高校に至るまでの期間を一貫して過ごすことが可能である点もフリースクールXの特徴である。所在する自治体の教育委員会や各学校からの認可をフリースクールXは受けており、小・中学生の児童生徒がフリースクールXを利用した場合には指導要録上で出席扱いにすることができる。それに加えて、私立通信制高校Y校のサポート校としての連携を行っているため、中学校を卒業した後にY校の生徒(「通信制コース」在籍者)としてフリースクールXを利用し続ける者が多くなっている。近年フリースクールが、私立通信制高校のサテライト施設としての役割を引き受けることによって、サポート校となる事例が増加していることが指摘されており(阿久澤2015)、フリースクールXも同様のケースであると考えられる。

3.2. 調査方法と調査協力者

筆者はフリースクールXへのフィールドワークを2013年12月から継続して行い、ボランティアの立場で日常的な活動に関わりながらスタッフや生徒へのインタビューを行ってきた。本稿における調査協力者は、フィールドワークの中で知り合った卒業生6名である(表2)。彼らは、フリースクールXの「通信制コース」に在籍し、Y校を卒業すると同時にフリースクールXを卒業している。基本的に在籍時から卒業後に至るまで筆者と継続して関わっており、フリースクールXでの経験や卒業後の生活に関するやりとりを行う際にフォーマル・インタビューを実施することになった。

表 2 調査協力者のプロフィール

仮名	性別	在籍期間	X 卒業後の進路	大学休学・中退経験	インタビュー（実施時）
ケンイチ	男性	3 年間	短期大学進学(家政系)	—	2015 年 10 月(大学 1 年) 2016 年 6 月(大学 2 年)
タケシ	男性	6 年間	大学進学（文学系）	—	2015 年 10 月(大学 1 年) 2016 年 6 月(大学 2 年)
ヒデヤ	男性	2 年間	大学進学（社会系）	大学 2 年前期から 何度か休学	2016 年 7 月(大学 4 年)
カズトシ	男性	2 年間	大学進学（看護系）	大学 1 年後期から 1 年間ほど休学	2016 年 7 月(就職 2 年目)
アツキ	男性	3 年間	大学進学（情報系）	大学 1 年後期から 休学した後に中退	2016 年 6 月(大学中退後) 2016 年 12 月 (〃)
マサムネ	男性	5 年間	未定（アルバイト）	—	2017 年 3 月(卒業 2 年後)

本稿では、2015 年 10 月から 2017 年 3 月にかけて実施した卒業生へのインタビューで得られた語りに基づいて分析を行う。また、スタッフへのインタビューやフリースクール X で得られたフィールドノーツも補完的に用いることにする⁽³⁾。

4. 進路をめぐるフリースクール X の理念と現実

まずは、フリースクール X の進路をめぐる状況を確認しておきたい。フリースクール X では、利用者の「やりたいこと」に応じた多様な進路を提供するための実践が行われている一方で、現実的には大学進学以外の進路の提供が難しい状況に置かれていることがうかがえた。

4.1. 「受容と共感」の姿勢にもとづく進路支援

フリースクール X では、「安心できる『居場所』を提供する」という理念にもとづいた実践が重視されており、在籍する利用者が「やりたいこと」を自由に取り組めるように、スタッフは「受容と共感」の姿勢（佐川 2010, p.53）による関わりを日常的に行っている。このような理念は卒業に向けた進路支援においても同様に貫かれており、利用者の「やりたいこと」に応じた進路を提供することをスタッフは強調していた。とりわけ、進路支援の力点が進学や就職の決定という進路達成にではなく、「やりたいこと」という進路希望を見つけしていくプロセスに置かれていた。

田中先生：今は思っている本人の希望であつたり夢だつたりするわけよね。それはしっかり応援する。(…)ひとつひとつの身近な目標から見つけていくことでいいのかなって。〇〇になりたい。レーザーであつたり漫画家であつたり水泳であつたり。そういう何らかの具体的なものがあれば応援してあげたい。なれる・なれないって、いうことを今は論じる時ではない。(2015.8.20.インタビュー)

フリースクールXの設立者である田中先生の語りには象徴されるように、スタッフによる進路支援に対するスタンスは、「なれる・なれない」という実現可能性に置かれていない。なぜなら、将来の「夢」や「やりたいこと」の実現に向けた具体的な目標を見つけていくプロセスが、利用者自身の「将来に対するエネルギーが溜まってくる(2014.7.3.インタビュー)」ことや、不登校経験による否定的な自己物語を読み替えることにつながると思えているからである。そのスタンスを裏付けるように、田中先生は利用者に対して「『大学進学に特化した指導はしません』って最初に言っている」と語っており、フリースクールXが大学進学に向けた受験指導を目的とした場所ではないことを強調していた(2016.12.7.フィールドノート)。このように、利用者の「やりたいこと」に応じた進路に向けたプロセスを周囲の人々がエンパワーメントしていくというフリースクールXの理念は、先行研究が指摘するフリースクールの理念とも一致していた(NPO法人東京シューレ編2000)。

4.2. 大学進学を「選ばざるをえない」現実

しかしながら、実際の進路状況を概観すると、フリースクールXにおける進路支援の実践を卒業後の進路に結びつけることの難しさが浮かび上がってきた。表3に示したのは、過去5年間における高校生段階の利用者(「通信制コース」在籍者)の進路状況である。就職や就労支援といった進路を歩んだ利用者も少なくないが、フリースクールXからの就職については縁故や自営業による就職が大半を占めている文脈がある。全体の半数の利用者が大学や専門学校といった高等教育機関へ進学をしていることや、進路未定者の多くが次年度

以降の大学進学に向けた準備等を行っている状況を踏まえれば、フリースクール X 卒業後の主な進路先は大学進学であるといえる。

表 3 「通信制コース」卒業者の進路状況 (2012-2016 年)

	進学				就職	就労支援	未定	計
	大学	短期大学	専門学校	大学校				
2012	1	1		1	1	2	2	8
2013	4	1	2		2	1	2	12
2014	4		2		2	1	3	12
2015	1						1	2
2016	4					1	2	7
計	14	2	4	1	5	5	10	41
割合	51.2%				12.2%	12.2%	24.4%	100.0%

※フリースクール X 内の資料より筆者作成。

ここで着目すべきなのは、フリースクール X では、大学進学を「選ばざるをえない」という限定的な状況が生じていることである。その背景には、大学進学以外の進路先の提供が難しい、というフリースクール X が置かれている社会的状況が影響している。近年では新卒市場は高卒から大卒へと移行し、民間機関であるフリースクールから高卒就職（とりわけ、「やりたいこと」と結びついた就職）を実現するのが非常に困難になっている。また、学力や卒業後の生活に不安を抱えている利用者がフリースクール X に多く在籍していることから、大学進学の実現は、利用者が居住する県内の大学や学校推薦・AO 入試制度が利用可能な学部・学科に限られている傾向にあった。これらの背景から、スタッフによる多様な進路を提供するための支援にも限界が生じていた⁽⁴⁾。

5. 「成功物語」としての大学進学

5.1. スタッフや保護者のための進学

フリースクール X が置かれた進路状況を踏まえて、卒業生の語りを見ていきたい。本稿の調査協力者の多くも、大学進学を「選ばざるをえない」という状況に直面しており、「やりたいこと」の実現のためというよりも学校推薦・AO 入試が利用可能な大学を限定的に選択していた。ところが、インタビューでのやりとりからは、「やりたいこと」の実現とは別の側面から大学進学をめ

ぐる物語が肯定的に語られていた。それは、「スタッフや保護者のために大学進学する」という物語である。例えばタケシは、スタッフや保護者の存在を強調しながら大学進学の意味について以下のように語っていた。

筆者：大学に行くってというのはどういう意味があったの？

タケシ：やっぱり、その6年間も（フリースクールXに）いたってということも理由なんですけど、（…）たぶん責任感なんです、そこはオレの。なんでかっていうと、その責任感というのはフリースクールXが自由すぎたからこそ、それも含めて、それもあったからこそ、自分はその何かに優しく守られていた。（…）こんな僕を認めてくれたから認めてくれた分をお返ししたいという気持ちですよ。そのギフトとかお礼を返したい。恩返しですね。

タケシは、フリースクールXに在籍した6年間を振り返りながら、自分が大学進学することによって、フリースクールXで支えてくれたスタッフや保護者に対する「恩返し」になると語っている。そもそも、フリースクールX在籍時のタケシは大学進学することを強く否定していた。「(学年が) 上がれば上がるほど、そして高3になると(大学進学が) 重く怖くなった」という不安から当時はフリーターを目指しており、スタッフから勧められた大学に対しても「なんか、(自分は大学を) 受けることになってるらしいですね。」と筆者に説明し、大学進学に対して消極的であった(2014.6.8. フィールドノート)。

このような背景を考えると、タケシは6年間のフリースクールXでの経験やスタッフや保護者の存在を想起することで、大学進学に対する否定的な意味づけを肯定的に捉え直していったと解釈することができる。大学進学を「責任感」と表現していることや『大学に行きたい』って気にならなかったけど、『大学で頑張ろう』っていう気は出てくる」と語っていたことからスタッフや保護者の存在がタケシにとって重要であることがうかがえる。タケシと同様に、大学進学に消極的だったアツキも「親も大学に行ってほしいっていう気持ちがあったみたいで（…）今後のことを考えたら絶対に行った方がいいってことで、それで行けるところから探そうと思うようになった」と保護者の希望に沿う形

で大学進学へのモチベーションを上げていったことを語っていた。

5.2. メインストリームの「学校」への復帰

さらに興味深いのは、「スタッフや保護者のために大学進学する」という物語とともに、大学進学がフリースクールXにおける「成功」として捉えられていたことである。カズトシは、以下のように大学進学のプロセスについて語っている。

筆者：カズトシの中では、大学に行ったプロセスのことをどう捉えているの？

カズトシ：私は成功だとしていますね。それは、なんていうんだろう、成功って言うより、他の人が言う成功と私の成功は違うんでしょうけど。(…) 親とか家族とかフリースクールXとかいろんな人に助けてもらったりしてもらって、愛情を注いでもらったりしてきたことをすごい感じてたんですね。特に親の教育、親の育て方が間違ってたんだっていう証明になっていると思っていて。

カズトシは、スタッフや保護者から「愛情を注いでもらった」フリースクールXでの経験を説明しながら、大学進学したプロセスを「成功」であると語っていた。また、「親の教育、親の育て方が間違ってたんだっていう証明」にもなっているという。

このように、大学進学のプロセスが「成功物語」として語られる背景には、「大学進学＝メインストリームへの復帰」という枠組みが強く意識されていることが関係している。例えば、ケンイチはフリースクールXから大学進学することは「同じ道に戻った」ことを意味していると、以下のように説明している。

筆者：大学に行ったことは、ケンイチの中で何の意味があったの？

ケンイチ：結局を言えば、同じ道に戻ったわけなんですよ、みんな。ちょっと外れたけど、結局同じタイミングで同じように遅れることなく戻ってきたとしたら、それは良かったことなんですよ。たぶ

ん引きこもっていたらこのタイミングで大学には入ってないから。(…) 僕も外れたけど、それは他の人にとってどうかは知らないですけど、僕にとってはこれは王道のまっすぐとした一本の道だったはずなんです。なので、それに関しては、寄り道して1年ぶら一つとすることなく、(大学に) 上がったっていうのはベストですね。

ケンイチにとっても大学進学は「成功」であった。一般の人たちと「同じタイミングで同じように遅れることなく戻ってきた」と実感できるのは大学進学という進路達成によってであり、不登校経験やフリースクールX経験を「良かったこと」や「王道」として肯定的に捉え直す契機にもなっていたことが分かる。ヒデヤも「(大学進学することは) 疑わなかった。だって肩書きがなかった時のことを(フリースクールXにいた) 当時はすごく思っていましたから」と語り、大学進学を「全日制(の学校)」に戻ることとして捉えていた。また、大学進学以外の進路を選択した卒業生においてもメインストリームの復帰として大学進学が強く意識されていた⁶⁾。このように考えると、カズトシが語っていた「親の教育、親の育て方が間違っていなかったんだっていう証明」も、彼にとっては他の進路ではなく大学進学が重要な意味を持っていたと考えられる。

以上の分析から明らかになったのは、フリースクールXの卒業生は、大学進学を「スタッフや保護者のため」や、「メインストリームへの復帰」と捉えることによって、フリースクールXの進路に関する「成功物語」の語りを構成していたということである。大学進学を「選ばざるをえない」という状況に卒業生たちが直面していたことを踏まえれば、自身の進路選択やフリースクールXでの経験を肯定的に捉え直すために、大学進学に重要な意味を見出そうとしていた語りとして解釈することもできるだろう。

6. 「成功物語」の意味づけがもたらす逆機能

6.1. 卒業後に再起する困難

大学進学が「成功物語」として重要な意味を持っていた一方で、卒業後の大

学生生活に焦点を当てた時には、「成功物語」とは逆のストーリーが語られていた。大学進学した卒業生の多くは、フリースクール X とは異なる環境で過ごす生活に不安を感じていることを語っており、とくに、ヒデヤ、カズトシ、アツキの 3 名は、大学進学後に休学や中退などの就学継続が困難な状況に直面していた⁽⁶⁾。3 名に共通していたのは、フリースクール X 在籍時以前に経験した不登校をめぐる困難が再び生じていたことである。カズトシは、大学進学後に休学に至った経緯を「友達で心ない奴とかもいたので、すごいストレスで休みがちで。(…) なんとか辞めずに行ってたけど、すごい (ストレスが) 溜まってからハジけそうになってから、辞めようかみたいな」と説明しており、対人関係のストレスが抑えきれなくなった経験は、高校時代に不登校になった時と同じであったという。フリースクール X 在籍時には、「自分の気持ちの波がちょっと穏やかになるような」日常を過ごせたことを語っていることから、カズトシの困難はフリースクール X 在籍時ではなく大学進学後に再び生じたことがうかがえる。また、ヒデヤも大学進学後に体調を崩し休学の時期が 3 年以上続くことになったが、それは進学校に通う中で精神的に疲れてしまった高校時代と同じ状況であった。

6.2. 「成功物語」のプレッシャー

もちろん、卒業後に様々な困難が生じることについてはフリースクール X 卒業生に限られたものではない。高等専修学校の教育実践に着目した伊藤 (2009, 2014b) は、卒業生の早期離職・中退に関する困難について、高等専修学校と卒業後の就職先・進学先との間に人間関係のギャップが存在することや進路展望が卒業後の様々な出来事の中で大きく揺らぐ可能性があることなどを明らかにしている。これらの指摘と同じような状況にフリースクール X 卒業生も直面していると解釈できるだろう。

しかし本稿で着目したいのは、大学進学を「成功物語」として意味づけたことが、卒業後の生活のプレッシャーにもなっていたことである。具体的には、大学進学に対するメインストリームの「学校」への復帰という意味づけが、大学生活に対する過剰適応を引き起こしていた。アツキは、世間一般に流布している「大学に入ったら遊べる」「大学は楽」というストーリーが、フリースク

ールX卒業生の自分には逆の意味を持つと以下のように語っていた。

アツキ：一般によく聞くことで、「大学に入ったら遊べる」「大学は楽だぞ遊べるぞ」みたいなのを言ってる。(…)やっぱり、全日(制高校)の人が大学に行くっていうのはまあ、楽になるかもしれないですけど。自分はほとんど自由登校(だったフリースクールX)から、(大学では)ほぼ毎日行くようになるっていう変化だったので、大学に通うっていうのは大変って思いましたね。

大学進学後に「ほぼ毎日行くようになる」という生活の変化は、アツキにとってメインストリームの「学校」での生活に戻ることを意味している。そのため、「最初はまだバリバリやるぞって気持ち」で大学の授業やサークル活動へ過剰にコミットし続けていたという。しかしその結果、「自分のペース」を考えられなくなるという、フリースクールX在籍時以前に経験した精神的負担が再び生じ、大学休学・中退の危機に直面していったのである。

さらに、「保護者やスタッフのため」という大学進学の物語も卒業後にはプレッシャーとなっていた。ヒデヤは、大学を休学するようになった経緯を説明する際に、学校推薦制度を利用したことが進学後にプレッシャーへ変化していったことを以下のように語っていた。

ヒデヤ：申し訳ないと思ってしまったんです。要は学校推薦をもらって行ったわけじゃないですか。フリースクールXの校印を押して出してもらっているわけですね。それに対しても、授業をする時にも、私に続くフリースクールXの生徒のためにも、私がきちんとしないといけない。(…)すごくプレッシャーになって。要はそこ(大学)でダメだったら辞めるしかない。(…)大学生に対して漠然と優等生のようなイメージを持ったんですね。

ヒデヤは学校推薦をもらって大学進学したことが「私に続くフリースクールXの生徒のためにも、私がきちんとしないといけない」という意識につながっ

たと語っている。その背景には、大学進学を学校推薦という形で実現してくれたスタッフや進路の相談に応じてくれたフリースクールXのメンバーの存在があった。しかし、その意識が卒業後にはプレッシャーとなり、「優等生」としてのイメージや「久しぶりの全日制だからアクセル全開みたいな」大学生活を過ごす要因になっていったのである。ヒデヤは大学を休学したことをスタッフに報告したことについて、「錦の御旗を背負って帰るつもりが、敗軍の将となって帰ってくるような、恥さらしのような気持ち」だったと語っている。大学進学がヒデヤにとって「錦の御旗」という「成功」として捉えられている反面、大学進学後の困難への直面が「敗軍の将」というほどネガティブなものとして捉えられていることがうかがえる。つまり、学校推薦による大学進学が「スタッフや保護者、あるいは他の利用者のため」という進学アスピレーションや「成功物語」としての意味づけにつながっていたにも関わらず、卒業後には「成功」し続けなければならないというプレッシャーに変化していたのである。

このように、フリースクールXからの大学進学を「成功物語」として意味づけることは、在籍する利用者の不登校経験やフリースクールXでの経験を肯定的に捉えることを可能にする一方で、卒業後の休学・退学の困難を顕在化させるという逆機能にもなっていた。

7. まとめと考察

本稿では、フリースクール卒業生による大学進学をめぐる語りから、フリースクール卒業後に大学進学するプロセスがいかなる意味を持つのかについて検討してきた。以下では、得られた知見をまとめるとともに本稿の学問的示唆を提示したい。

まず、本稿で明らかになった知見についてまとめよう。フリースクールXでは、大学進学を「選ばざるをえない」という限定的な進路状況が生じていたにも関わらず、卒業生は大学進学を「スタッフや保護者のため」や「メインストリームへの復帰」と捉えることによって、フリースクールXの進路に関する「成功物語」の語りを構成していた。一方で、大学進学を「成功物語」として意味づけたことが卒業後の生活のプレッシャーにもなっており、「成功物語」

の意味づけが、大学生活への過剰適応による休学・退学といった、フリースクールX在籍時以前に経験した困難を再び生じさせる要因にもなっていた。つまり、大学進学するプロセスは、在籍する利用者の不登校経験やフリースクールXでの経験を肯定的に捉えることができるポジティブな意味を持つだけでなく、卒業後の休学・退学の困難を顕在化させるネガティブな意味も持っていることが描き出されたのである。

本稿の知見からは、以下の2点の学問的示唆を提示することができる。1つ目は、既存の「学校」とは異なった実践に意義を見出してきたフリースクールにおいても、「学校」の存在やメリトクラシーの影響を強く受けているということである。調査協力者である卒業生は、フリースクールXにおける「学校」ではない空間や日常実践に重要な意味を見出していたにも関わらず、卒業後は大学進学という形でメインストリームの「学校」に包摂されることを強く求めていた。なぜなら、大学進学を「メインストリームへの復帰」として結びつけながら「望ましい進路＝成功物語」と捉えていたからである。学校的なメリトクラシーの呪縛から逃れられない構造が通信制高校生の進路形成に存在することを明らかにした尾場（2015）の知見を踏まえれば、フリースクールにおいてもメリトクラシーの呪縛と向き合わざるをえない状況が生じていることが明らかになったといえる。

2つ目は、当事者の視点からフリースクール卒業後の生活世界を検討することで、大学進学をめぐる卒業生が抱えるジレンマを描き出したことである。卒業生へのインタビューでは、大学進学を「成功物語」として肯定的に意味づけていたことが明らかになった。しかし、進路先が大学進学に収束しているという外的要因や、スタッフや保護者の存在や期待が卒業後にはプレッシャーになったという語りに着目すると、彼らが大学進学を「肯定的に語らざるを得ない」文脈に置かれていることが浮かび上がってきた。つまり、大学進学に対する卒業生の意味づけがフリースクール在籍時と卒業後で変化しており、在籍時に肯定的に意味づけたはずの「成功物語」を、卒業後には大学生活に対する「抑圧」として受け入れざるを得なくなるというジレンマが生じているのである。フリースクールにおいて、大学進学を進路達成を安易に「成功」と位置づけ、「メインストリームへの復帰」として大学進学することを過度に求めていくことが、

当事者の人々にとって逆効果をもたらすことにもつながりかねない。また、フリースクール X 在籍時以前に経験した不登校をめぐる困難が卒業後に再び生じていたことも踏まえれば、フリースクールにおける「居場所」での経験を卒業後の生活世界とどのように折り合わせていくのかという課題を慎重に議論していく必要があるだろう。

実践的なインプリケーションとしては、上記の課題をフリースクールの実践や在籍する利用者個人の問題として還元するのではなく、多様で柔軟な進路形成に向けた支援体制を整備していく必要性を提起することができる。伊藤(2009)が指摘するような、「なだらかな移行」による進路形成を後期中等教育後にも支援していくシステムを構築していくことは、フリースクールの卒業後においても必要に迫られているといえる。

とりわけ、インタビューでは卒業後の困難を乗り越えるためにフリースクール X の支援を再び利用していることが語られており、フリースクール X のスタッフも『学校』ではない」というフリースクールの柔軟な制度的位置づけを生かして、卒業後も継続して関わり続ける実践を模索していた。この点について本稿では取り上げることができなかったが、フリースクールが卒業後に果たす役割を明らかにしていく可能性に拓かれているといえるだろう。

最後に、本稿の限界について述べておきたい。フリースクール X 卒業後に焦点を当てた分析を行ったため、フリースクール X 内部において利用者がメインストリームへの帰属を内面化していくプロセスやスタッフの実践の詳細などについて十分に検討することができなかった。また、本稿の調査対象者の卒業生にも偏りが生じており、フリースクール X をめぐる進路の全体像を描き出せているとは言い切れない⁽⁷⁾。今後は、大学進学以外の進路を歩んだ卒業生の生活世界を本稿の知見と照らし合わせて分析することや、フリースクールの内部実践をメインストリームとの関係から批判的に検討していくことなどが課題である。

注

- (1) 日本における「フリースクール」概念の整理を行った田中（2016）は、「フリースクール」の概念や定義はきわめて曖昧であり濫用されていることを指摘している。本稿では「フリースクール」概念の多義性と流動性を踏まえて「主に不登校の子どもを受け入れる非一条校の民間施設」と広義的に捉えることにしている。
- (2) 藤根・橋本（2016）は、全国のオルタナティブスクール650校に対する量的調査によって、フリースクールを含むオルタナティブスクールの設立数が社会の変動に対応しながら増加しており、理念・活動形態に多様な特徴が見られていることを明らかにしている。
- (3) フィールドへの参入にあたっては、フリースクールXの代表である田中先生に調査目的を説明し、利用者とのやりとりをフィールドノートに記録することやインタビューを行うことの手続きを得ている。すべてのインタビューは許可を得た上でICレコーダーに録音し逐語的に書き起こしを行っており、調査協力者の承諾が得られたものを使用している。また、使用するフィールドノートやインタビューデータには、個人の特定防止と読みやすさを考慮して若干の加工を施している。なお、トランスクリプト内の（…）は中略を意味する。
- (4) 利用者が就職を希望する場合の進路支援の困難さについて、スタッフの佐藤先生は、「普通の高校には、ある程度求人があるので就職に対応できるんだけど、（連携している）通信制高校にはそういうのはなかなか来ない」（2014.10.16.インタビュー）と語っており、フリースクールXへの求人が一般の高校に比べて極めて少ない状況が大きく関係しているという。また、大学進学に関する進路支援についても、田中先生は、「（進学先を）決めきれない子には、（…）大きい大学がいいのか、小さい大学がいいのかとか、（家から）距離が遠い方がいいのか、近い方がいいのか」（2014.8.6.インタビュー）というように、大学に関する細かな条件をスタッフから提示していく関わりをせざるを得ない側面を語っていた。
- (5) 卒業後にアルバイトをしながら生活しているマサムネは、現在の自分の状況を説明する際に「早く年齢的に間に合わせたい」「フリースクールXの他の人よりも遅い」と語っており、大学進学しなかった自分が他の卒業生と比べて「遅れている」状況であると否定的に意味づけようとしていた。マサムネの語りからは、大学進学の有無に関わらず、フリースクールXの利用者たちにとって卒業後に大学進学することが「メインストリームへの復帰」として重要な意味を持っていることがうかがえる。
- (6) ケンイチとタケシについては、卒業後に休学や退学したことは語られていなかった。しかし、大学進学に対して「学校に行くっていう辛さがあまり解消されてない」と懸念するケンイチや、「（大学は）学生らしさを戻させる、高校生っぽさのようなあるべきところへ戻されるっていうので最初は怖かった」というタケシの語りからは、メインストリームへの復帰として大学進学を意味づけるとともに、大学生活に対する不安を強く感じていたことがうかがえる。また、卒業後にフリースクールXを頻繁に訪れてスタッフに相談を行っていたことから、大学生活を継続していく上で困難に直面していたことが考えられる。
- (7) 本稿の調査協力者は、卒業後にフリースクールXに頻繁に訪れている者や筆者と面談がありインタビューを承諾した者に限られている。また、フリースクールXの利用者における女性の割合が2割程と低いこともあり、女性の卒業生に対するインタビューを本稿では実施することができなかった。今後は、卒業後にフリースクールXを訪れていない卒業生や女性の卒業生への調査を行い、大学進学に対する意味づけの多様性を描き出していく必要がある。

引用参考文献

阿久澤麻理子 2015 「広域制通信制高校における学びを支えるフリースクール：後期中等教育の学習権保障の主体とは」『人権教育研究』第15巻, pp.33-48.

- 朝倉景樹 1995『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社.
- 藤根雅之・橋本あかね 2016「オルタナティブスクールの現状と課題：全国レベルの質問紙調査に基づく分析から」『大阪大学教育学年報』第 21 巻, pp.89-100.
- 伊藤秀樹 2009「不登校経験者への登校支援とその課題：チャレンジスクール, 高等専修学校の事例から」『教育社会学研究』第 84 集, pp.207-226.
- 伊藤秀樹 2014a「“非主流”の後期中等教育機関を概観する一生徒層・カリキュラム・進路」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 54 巻, pp.551-563.
- 伊藤秀樹 2014b「高等専修学校における進路決定：進路展望を形成する『出来事』の分析より」『子ども社会研究』第 20 号, pp.61-74.
- 伊藤秀樹 2017『高等専修学校における適応と進路：後期中等教育のセーフティネット』東信堂.
- 貴戸理恵 2004『不登校は終わらない：「選択」の物語から（当事者）の語りへ』新曜社.
- 古賀正義 2015「高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から」『教育社会学研究』第 96 集, pp.47-67.
- 森田洋司編 2003『不登校その後：不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』教育開発研究所.
- NPO 法人東京シューレ編 2000『フリースクールとはなにか』教育資料出版会.
- 尾場友和 2015「通信制高校生をめぐるメリトクラシーの呪縛」『教育学研究ジャーナル』第 17 号, pp.1-9.
- 御旅屋達 2015「若者自立支援としての『居場所』を通じた社会参加過程：ひきこもり経験者を対象とした支援の事例から」『社会政策』第 7 巻 (2), pp.106-118.
- 佐川佳之 2009「フリースクール運動のフレーム分析：1980～1990年代に着目して」『教育と社会』研究』第 19 号, pp.46-54.
- 佐川佳之 2010「フリースクール運動における不登校支援の再構成：支援者の感情経験に関する社会学的考察」『教育社会学研究』第 87 集, pp.47-67.
- 住田正樹 2004「子どもの居場所と臨床教育社会学」『教育社会学研究』第 74 集, pp.93-109.
- 田中佑弥 2016「日本における『フリースクール』概念に関する考察：意識としての『フリースクール』とその濫用」『臨床教育学論集』第 8 号, pp.23-39.
- 内田康弘 2016「サポート校生徒と大学進学行動：高校中退経験者の『前籍校の履歴現象効果』に着目して」『教育社会学研究』第 98 集, pp.197-217.
- 山田哲也 2010「学校に行くことの意味を問い直す」志水宏吉 監修『教育社会学への招待』大阪大学出版会, pp.77-95.